

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520745

研究課題名(和文) 英語の前置詞の棲み分け研究と高大連携に基づく自学自習用教材の作成

研究課題名(英文) The study of English prepositions and its application to teaching materials based on high school-college liaison

研究代表者

花崎 一夫 (HANAZAKI, Kazuo)

信州大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：40319009

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では様々な英語の前置詞の意味論的研究を行なった。その一つが前置詞のatであるが、英和辞典の意味記述は様々なatの用法の日本語訳に過ぎないことを指摘した。我々は、atの持っている唯一の意味は「特定」であるとし、辞書に記述されている意味記述は、atの様々な用法にすぎないと考えた。このような観察に基づき、atを含む様々な英語の前置詞に関する教材を作成し、それを大学の英語教育の現場に還元した。

研究成果の概要(英文)：In this study we took up various English prepositions. One of the prepositions we studied is "at". We found out that typical English-Japanese dictionaries ended up describing various usages of "at" in Japanese, which is not satisfactory from an educational point of view. We argued instead that the only meaning "at" has is "specification" and that the list of purported meanings of "at" is actually various usages of "at". Based on this observation, we created the teaching materials concerning various English prepositions including "at" and contributed to the English education in our university.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語の前置詞

## 1. 研究開始当初の背景

前置詞の多義研究は、1語の多義を扱う Semasiological な研究 (例: fruit は果実・結果・・・という意味があるとする研究) が中心となっている傾向があるが、本研究では、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点 (例: 果実を表す語には fruit・nut・・・があるとする視点) を加え、その近似義語間に見られる意味の重なり of 緊張関係が意味拡張を阻止すると考える。先行研究には、2語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだない。

我々は以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように Semasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、慣用表現としてのみ存在するということがわかり、この考えのもとに前置詞の棲み分け研究を行い、一定の成果をあげてきた。

ただ、このような観点から前置詞そのもの

の研究を行ったとしても、その成果を教材にまとめ、それを有効な形で教育現場に還元しない限り、英語教育に貢献することはできない。我々はその点に着目し、認知言語学的視点からの研究で得られた知見を、効率よく英語教育の現場に役立てることを目指すべく研究をすすめることになった。

## 2. 研究の目的

前述の背景をもとに、本研究では主要な英語前置詞の意味論的研究を行うとともに、その成果を教材としてまとめ、英語教育の現場に還元することを目的とした。より具体的には、認知言語学的視点からの前置詞の研究で得られた知見を学会発表、論文等で公開するのみならず、教材としてまとめ、それを大学などの英語教育の現場で実際に活用することを目的とした。

## 3. 研究の方法

多義語の意味拡張に、従来はあまり考慮されてこなかった近似義語の研究を行う Onomasiological な視点をいれることが本研究一つの大きな特徴である。Onomasiological な視点を導入すると、従来の研究で問題だった「際限ない意味拡張」を阻止できると同時に、「新しい意味の予測」が可能になる。またこの視点を導入することにより、孤立用法や慣用表現の中心スキーマとの関係をもよりよく説明出来る。

慣用表現とは、2語以上の語が集まって使われる表現 (例: but for, by day) であるが、従来の多義研究では、それらは、メタファーやメトニミーによる意味拡張によってできたと説明されてきた。ところがその説明だけでは、意味拡張を制限出来ないだけでなく、どうして中核から大きくはずれた意味は、2語以上の語が集まった慣用表現の形でしか残ることができなかつたかが

説明出来ない。本研究は、慣用句は、onomasiologically に共存していた複数の語の内(例:「～の間」by, during)、他の語にブロックされたものは、別の語との組み合わせの中でのみ存在しうる(別の語の助けを借りてのみ存在しうる。例:「～の間」なら、during によってブロックされた by は、day という別の語の助けを借りて by day という慣用句としてのみ生き残れた)ものであるという見解をもつ。

#### 4. 研究成果

本研究はその研究結果を、高校生の英語教育、そして大学生の英語教育・英語学教育へ還元することを視野に入れて行われた。一般的に「機能語」と呼ばれる語の学習は、英語学習者が最も困難に感じる学習の一つである。そこで本研究は、個々の前置詞の意味を、前置詞の「棲み分け」を体系的に説明することを通して明らかにすることによって、多くの英語学習者が困難に感じる「機能語」の学習の負担を軽減することをめざし、その成果を教材にまとめ、主に大学の英語教育の現場で活用した。

より具体的には、作成した教材を授業中に活用するだけでなく、e-ALPS という信州大学独自の、 Moodle を活用した e-learning システム上に教材をアップロードすることで、学習者がいつでも好きな時に英語学習をすることができるようにした。こうすることで、比較的英語が苦手な学習者も、授業外の時間に自学自習することが可能になり、結果的に、大学生の英語力の底上げを実現することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

①Author: 花崎 一夫・赤羽佑太

認知言語学の知見を活用した英語教育の可能性—be-to 不定詞を中心に—  
言語教育センター実践報告 , 査読なし(第3号):28-36 2014(Mar.)

Keywords: 認知言語学 英語教育

②Author: 加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

To の意味論—英語教育への応用を目指して  
英文学研究 支部統合号 , 査読有り Vol. VI:239-245 2014(Jan. 20)

Keywords: 英語 前置詞 To

③Author: 脇淵良太・赤羽佑太・藤原隆史・早野勇馬・花崎 美紀・花崎 一夫

An Analysis of a Causative Verb Have from the Cognitive Linguistic as well as the Contrastive Linguistics Perspective  
Hawaii University International Conferences Arts, Humanities and Social Sciences 査読有り 2014(Jan.)

④Author: 脇淵良太・赤羽佑太・藤原隆史・早野勇馬・花崎 美紀・花崎 一夫

The "Habitat Segregation" of Expressions Denoting Futurity, and its Application to TESL

Hawaii University International Conferences Arts, Humanities and Social Sciences , :1-17 査読有り 2014(Jan.)

⑤Author:加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

To の意味論 日本英文学会中部支部第85回大会 Proceedings , :169-170 査読なし 2013(Sep.)

Keywords:英語 前置詞 To

⑥Author:花崎 一夫

LMS プラグインを活用した英語教育 言語教育センター実践報告 , 第1・2号:49-54 査読なし 2013(Mar. 29)

⑦Author:花崎 一夫

ICT を活用した英語教育 グローバル人材育成のための語学教育の可能性 , :65-80 査読なし 2013(Mar.)

Keywords:グローバル人材 ICT活用教育

⑧Author:花崎 美紀・花崎 一夫

Onomasiological な観点からの前置詞 For の意味論 英文学研究 , Vol. V:121-124 査読有り 2013(Jan. 20)

Keywords:英語 前置詞 For

⑨Author:花崎 美紀・花崎 一夫

For の意味論再考 『人文紀要文科学論集(文化コミュニケーション学科編)』 46 , 46(46) 査読有り 2012(Mar.)

<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/handle/10091/15659>

⑩Author:花崎 一夫

認知言語学の知見を生かした英語教育の実践に向けて 信州大学人文社会研究 6: 8, (第6号):87-94 査読有り 2012(Mar.)

<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/handle/10091/15629>

[学会発表] (計 2件)

① At の意味論

日本英文学会中部支部第65回大会 2013.10.5. 椋山女子大学

Author:加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

② To の意味論

日本英文学会中部支部第64回大会 2012.10.27 南山大学

Author:加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

[図書] (計1件)

Author:花崎 一夫・花崎 美紀

ブイツーソリューション

パターンで学ぶ英会話—英語の型を覚えよう!— 2013年1月 155ページ

Keywords:英文法 英会話 パターン

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花崎 一夫 (HANAZAKI, Kazuo)

信州大学・全学教育機構・准教授

研究者番号: 40319009

(2) 研究分担者

花崎 美紀 (HANAZAKI, Miki)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号: 80345727

(3) 研究分担者

加藤 鉦三 (KATO, Kozo)

信州大学・高等教育研究センター・教授

研究者番号: 20169501